

聖 靈 論

——福音派の今日的課題⁽¹⁾——

真 鍋 孝

序

キリスト教会が伝統的に堅持してきている教理は数々あるが、その中でも三位一体の教理は最も重要なもの一つである。教理史やキリスト教会史を学んだ者ならば誰しも知っていることではあるが、この教理が確立されるまでに多くの神学論争がなされた。そして、その過程で、当然のことながら、聖霊に関して多くの論議が尽くされた。であるから、三位一体論内での聖霊に関する研究は古いものであり、それに関する聖書の真理体系は確立されていると考えてよい⁽²⁾。

では何ゆえ、今福音派教会内で聖霊に関する関心が高まり、聖霊論の見直しが叫ばれるようになったのか。このことの理解のために、今世紀に入ってから一つの顕著な宣教面における動きについて触れる必要がある。

今世紀に入ってから、ペンテコステ運動、そして一九六〇年代に入ってから新ペンテコステ運動（カリスマ運動）

が、プロテスタント各教派、またカトリックにも多大な影響を与えている⁽³⁾。またフラー神学校の世界宣教学部で開かれた一つの宣教セミナーを起点として、ジョン・ウインバー、ピーター・ワグナーなどによって提唱されている Power Evangelism (力による伝道) は、福音派の内側から出てきた聖霊運動の一つと考えられる⁽⁴⁾。

このような背景の中で、一九七四年のローザンス世界伝道会議において、教会の健全な形成において、聖霊の主権的な働きの必要性が強調され、聖霊に関する次のような誓約が採択されている。

それゆえ、私たちは、み霊のすべての実が神の民全体のうちに現われ、み霊のすべての賜物がキリストのからだなる教会を豊かに潤すような、神の主権的なみ霊の訪れが与えられるように祈ることを、すべてのキリスト者に呼びかける⁽⁵⁾。

また、一九八九年マニラで開かれた世界伝道会議においても、福音宣教の担い手である聖霊なる神の真に聖書的な働きを正当に認めていく宣言が採択されている。一部を引用すると次のようになる。

在世中のイエスの奇跡は、イエスのメシヤであることの証拠であり、すべての被造物がキリストに従う御国の来ることを予想させるための特別なしるしであるが、今日、目に見えない形で生きて働かれる神の奇跡の力に限界をおく必要はない。私たちは今日奇跡など無いと頭から否定する懐疑主義もたないし、奇跡は必ず来させると主張する高ぶった立場も取らない。また、御霊の充満を妨げる臆病さも持たないし、神の力の完全さを妨げる傲慢な勝利主義の立場もとらない⁽⁶⁾。

これらの世界会議の聖霊に関する宣言でも明らかのように、今の福音派諸教会の大きな必要の一つは、聖書の教論の確立のために聖霊論を聖書的に見直すことである。今世紀に入ってから起こされてきている一連の聖霊運動を真正なものとなすコンセンサスが確立されつつある今、それをキチツと説明できる聖書の聖霊論が必要とされている。それによってみことばが支持する真正な聖霊の働きと、そうでないものがはっきり区別できることにもなるので、ある面において福音派教会の急務とも言えるであろう。

このような要請の中で、日本福音主義神学会第六回全国研究会議が、昨年十一月京都で開催された。コーディネーターとして奉仕した筆者の強調した方向性は、今日的課題である宣教論と強く結び付いた聖霊論の展開であった。残りの紙数は、今回の研究会議の発題内容決定への指針となった聖霊論の今日的テーマと思われる事柄について述べたい。

一、「史的聖霊」研究の必要性

聖霊は三位一体なる神の第三位格であるので、永遠から永遠に存在されるお方であり、当然のことながら神としての属性を持つ。であるから、このお方の神としての存在、また属性や行為に関する時と空間を越えた普遍的な記述は可能である。そしてこの面における神学研究は十分になされてきた。三位一体論の中で論じられてきた聖霊論はこの領域に属する。今、更に必要とされている研究は、聖霊の史的な観点からの理解である⁽⁷⁾。史的イエス (Historical Jesus) の研究が、種々の問題性を包含しながらも⁽⁸⁾ 受肉し地上で生涯を送られた第二位格としての御子の理解に大きな役割を果たしてきた。それと同じように、第三位格なる聖霊の理解のために、史的聖霊 (Historical

Holy Spirit) の観点に立った研究が不可欠であることを強調したい。

御子の受肉、宣教活動、受難、復活、昇天の歴史的現象は、旧約聖書でメシヤに関して将来起こる現象として預言されていたことの成就であった。旧約聖書のどこでどのように預言言及されているのか、そしてそれがいつどこでどのように成就されたのか、更に、その成就は人類にどのような意味があるとされたのか、これらの質問に答えるためには、厳密な、また徹底した聖書神学的研究が必要である。傍点を付したのは特に強調すべきと考えるからである。福音主義神学は、聖書のみで啓示されている情報をもれなく集め、分析し、解釈して、それらに基づいて構築されなければならない。分析者、解釈者という格子を通しての作業としても、聖霊の助けによって例えば四福音書記者や各書簡の著者に共通して見い出される中核的ケリユグマを確立することもできるのである。こういう意味で、御子に関しては、私たちプロテスタント福音派内では、ほぼ一致した史的イエスとそのケリユグマ理解に到達していると言いうことができる。

しかしながら、この面における史的聖霊の研究はまだ十分とは言えない段階と思われる。昨年十一月京都で開催された日本福音主義神学会第六回全国研究会議での発題と応答は、この史的聖霊研究の枠組の内になされ、日本の福音主義を代表する諸教派間の貴重な意見交換の時となった⁽⁹⁾。

本論文では、史的聖霊の研究の中で、最も基本的なものである「聖霊の来臨に関する未来言及」と、福音派内での聖霊論を二分している最も中核的な問題である「聖霊体験の二重性」の二つの事柄について、検討を加えていくことにする。

二、聖霊の来臨に関する未来言及

史的聖霊の研究は、史的イエスの研究と平行して試みると興味深い。永遠から永遠に遍在する第二位格なるみ子の受肉は、旧約聖書の中に未来起こるべき事として預言されている。処女マリヤを通して、一人の男児がこの世に誕生したとき人間イエスの歩みが始まった事になる。即ち史的イエスとしての神の實在が歴史の中に史実として刻まれることになったのである。

これと同じように、永遠から永遠に遍在する第三位格なる聖霊のこの歴史への来臨が、旧約聖書にまた特に新約聖書に預言されているのである。この預言の中核的な聖句が、使徒の働きの一章に出てくる。

⁴ 彼らといっしょにいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。⁵ ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」

⁸ しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

¹¹ そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになりま

四節から八節までのイエスのことばは、イエスの復活の後、弟子達に現われて語られたものであり、イエスは八節のことばのあと昇天した。四、五節と八節に、聖霊の来臨に関する未来言及がイエスによってなされている。イエスの言及で次の三つの事柄に留意したい。

- ① 聖霊の来臨は、「父の約束」(四節)である。この約束は明らかに旧約聖書の中に見い出される筈である。
- ② 聖霊の来臨は、バプテスマのヨハネの水のバプテスマと対比されて「聖霊のバプテスマ」(五節)と呼ばれている。このイエスの指摘から、四福音書の中に記されているバプテスマのヨハネによる来たるべきメシヤのわざに関する言及を想起する必要がある。それらは、マタイ三・一一、マルコ一・七〇八、ルカ三・一六、ヨハネ一・二三であるが、イエスが聖霊によってバプテスマを授けることが預言されている⁹⁹⁾。
- ③ 聖霊の来臨は、「エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで」(八節)キリストの弟子達をキリストの証人とする力を与えたとされている。そして、このような聖霊の来臨による宣教のための力の賦与は、十一節に示唆されているごとく、キリストの再臨の時まで続く筈である。

①のポイントから、ルカの福音書二四・四九が同じ聖霊の来臨への未来言及として出てくる。

さあ、わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所

から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。

(下線は筆者のもの)

更に、旧約聖書からも、父なる神の約束としての聖霊の来臨の預言としては、イザヤ一・二、三二・一四〇一五、四二・一、四四・三、五九・一九、一一、六一・一〇一、エゼキエル三六・二五〇二七、ゼカリヤ二・一〇、ヨエル二・二八〇二九が主なものとして出てくる¹⁰⁰⁾。これらの聖句の中でヨエル二・二八〇二九が特に重要である。というのは、ペンテコステの日の事象(使徒の働き二・一〇一六)を体験したペテロは、それがヨエルによって預言された事の成就としてヨエル二・二八〇三二を引用しているからである。

②、③のポイントから、ヨハネ七・三八〇三九やヨハネ一四・一六章に出てくる聖霊に関する事象の多くの未来言及が導き出されてくる。

これらのいもずる式に導き出されてきた聖霊の来臨に関する未来言及は、明らかに一つの歴史的事象を目指していると考えられる。この点に関しては、村上久氏も、これらの未来言及は、使徒の働き二章のペンテコステの事件で成就したと結論している¹⁰¹⁾。この結論は、ペンテコステの事件後、ペテロがその事件を、「御父からの約束」(使徒の働き二・三三)の成就としたこと、更に後の時点で使徒の働き二・四〇五で主イエスが語ったことばを思い出して、コルネリオの一族に起こったことも、ペンテコステの事件と同じように「聖霊によってバプテスマを授けられる」(一一・一六)事象であると判断していることの両方の証言によっても支持されている。

聖霊の来臨に関する未来言及を、旧約と新約から系統的に集め、それらを分析していく中で次の二つの大切な観察結果が出てくる。

第一に、聖霊のバプテスマの事象を指示する数多くの言語表現(パラフレイズ)が可能であるということである。

例えば、

「聖霊のバプテスマを受ける」(使一・五)

「いと高き所から力を着せられる」(ルカ二四・四九)

「聖霊と火とのバプテスマをお授けになる」(マタイ三・一一)

「イエスを信じる者が受ける御霊……御霊が注がれる……」(ヨハネ七・三九)

「キリストが父なる神から遣わす助け主……真理の御霊が来る」(ヨハネ一五・二六)

「聖霊が臨まれるとき力を受ける」(使一・八)

これらの表現は全て同一の現象を種々の角度から記述しているものである。さらに、行為者、被行為者の観点からこれらのデータを整理してみると、

〈行為者の立場〉

「力を着せる」|| 「聖霊の火とのバプテスマを授ける」|| 「御霊を注ぐ」|| 「助け主を遣わす」

(||はイーコール「等しい」の意)

〈被行為者の立場〉

「聖霊のバプテスマを受ける」|| 「力を着せられる」|| 「御霊を受ける」|| 「御霊が来る」

となり、これらは細かい周辺の意味に相違があっても、その中核的な意味は、同じ事象への指示である。聖書は「聖霊のバプテスマ」という用語に唯一独特な意味を与えているという考え方に十分反論できる根拠の一つはここに

にある。

第二の観察結果は、聖霊の来臨の未来言及は、次の七つの項目に要約することができるということである。

①キリストが聖霊のバプテスマを授ける

(マタイ三・一一、マルコ一・八、ルカ三・一六、ヨハネ一・二三三、使徒一・五)

②キリストを信じる全ての者が御霊を受ける

(ヨハネ七・三九、ヨエル二・二八―三二)

③キリストが昇天後栄光を受けた後に御霊が注がれる

(ヨハネ七・三九、一六・七、使徒一・五)

④昇天後のキリストの願いに基づいて父なる神がキリストの弟子に聖霊を遣わして与える

(ヨハネ一四・一六、一六、一五・二六)

⑤父なる神の旧約聖書で預言した約束の成就としておこる

(ルカ二四・四九、使徒一・四)

⑥エルサレムで起こる

(ルカ二四・四九)

⑦キリストの証人として福音をエルサレムから始めて、ユダヤとサマリアの全土、および北の果てにまであらゆる国の人々に宣べ伝えるため力を着せられる

(ルカ二四・四七―四九、使徒一・八)

これらの七つの項目が、歴史の中でどのように成就していったかを細かく見るのが次のセクションの目的である。既に述べたようにこれらの成就がまずペンテコステの事件であったことは明らかである。次のセクションの更に重要なもう一つの目的は、キリストの弟子達のペンテコステにおける聖霊体験の二重性の解明である。

三、聖霊体験の二重性の解明

聖霊の来臨に関する未来言及の研究は、必然的にこの課題へと導く。

キリストの公生涯の中で、信仰を持つようになった弟子たちは、明らかに聖霊によって「イエスはキリストである」と告白するようになったと思われる。であるから、この時点ですでに回心と新生の聖霊体験をしたと言えるであろう。しかしながら、弟子達はもう一つの聖霊体験を、キリスト昇天後のペンテコステの日に行うことになるのである。何ゆえ、この二重の聖霊体験が必要であったのか。この問いに対する応答によって、現在の福音派内にある聖霊論の種々の立場が浮き彫りになる。

キリストの弟子たちのこのペンテコステの聖霊体験は、その後のキリスト教会の信者が回心・新生に伴う聖霊の働きの次のステップとして受けるべき二度目の聖霊体験の必要性を示しているのだろうか⁽¹³⁾。それとも、救済史上における繰り返されることが期待されていない神のしるしとしての体験であったのだろうか⁽¹⁴⁾。この福音派の聖霊論を二分していると思われる事柄に対して、聖書神学的なアプローチに基づく徹底した研究がまだ不十分な状況にあると思われる。この拙論がその状況を是正する一助になればと願う。このような研究の視野の中に、ペンテコステ事件と類似の事象と思われるサマリヤでの事件(使徒八章)、カイザリヤでの事件(使徒一〇章)、エペソでの事件(使徒一九章)も入れなければならない。

ここに一つの聖書神学的研究の結果を紹介する。この研究の方法論は、既に紹介した七つのポイントで要約された聖霊来臨の未来言及の預言が使徒の働きの記述の中でどのように成就しているかを見ることである。そこで順序として、(一)使徒二章のエルサレムでのペンテコステの事件(丁で略記)、(二)使徒八章のサマリヤの事件(Sで略記)、(三)使徒一〇章のカイザリヤでの事件(Cで略記)、(四)使徒一九章のエペソでの事件(E)、(五)その他の初代クリスチャン群、を定めそれぞれに登場する人々がどのような聖霊体験をしていたかを検討したく思う⁽¹⁵⁾。

(一) 丁事件

エルサレム(丁)での事件を使徒二・一―二三の中で追ってみると次のように要約できる。

- Ja 天から激しい風が吹いてくるような響きが起こった(二節)
- Jb 炎のような分かれた舌がひとりひとりの上にとどまった(三節)
- Jc みな聖霊に満たされた(四節)
- Jd 異言(他国のことば)で宣教のことばを語った(四―二三節)

これらのJa-Jdの事象が果たして、聖霊来臨の預言の要約ポイント①―⑦の成就となっているのだろうか。答えは肯定的である。そのためには、丁事件をペテロや初代教会がどのように理解していたかを調査する必要がある。以下、預言要約ポイントを一つずつ取り上げて議論していく。

①キリストが聖霊のバプテスマを受ける

J事件においてこれが成就したことは、使徒一・五のキリストの預言と、J事件についてのペテロの証言である。使徒二・三三「ですから、神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです。」によって明らかである。使徒一・一五―一六のペテロの証言も加えることができる。

②キリストを信じる全ての者が御霊を受ける

J事件においては、使徒一・一五に示唆されているように百二十名ほどの兄弟たちが集まっていたかと思われるが、Jbで記述した事象が「ひとりひとり」(三節)に起こったと記されているので、②も成就したと判断できる。しかし、そこに居合わせた百二十名ばかりだけの体験であったことは明らかであるが、当時、キリストを信じていた人々に関しては触れられていない。

③キリストが昇天後栄光を受けた後に御霊が注がれる

①のポイントで引用した使徒二・三三のペテロの証言から、J事件がイエスが神の右に上げられ栄光を受けた後に起こったことは明らかである。

④昇天後のキリストの願いに基づいて父なる神がキリストの弟子に聖霊を遣わして与える

④のポイントもペテロの証言である使徒二・三三より成就したと判断できる。

⑤父なる神の旧約聖書で預言した約束の成就として起こる

このポイントもJ事件後のペテロの証言によって成就していることが明らかである。使徒二・一六によると、ペテロはJ事件が、旧約聖書のヨエルの預言の成就だと明言した。更に使徒二・三九によると、ペテロが自分のメッセージに耳を傾けている人達に、賜物としての聖霊を受けることは神である主の約束であり、召される全ての者があずかれる祝福だと主張している。

⑥エルサレムで起こる

使徒二・一に記されている「みなが一つ所に集まっていた」場所は、二章五節によると明らかにエルサレムにあった。

⑦キリストの証人として福音をエルサレムから始めて、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまであらゆる国の人々に宣べ伝えるため力を着せられる

Ja、Jbの事象は明らかに、力を着せられた事実を象徴的に示す現象である。そして、Jc、Jdでは、二章一節にあるごとく「神の大きなみわざ」を語っているのであるから、エルサレムにおけるキリストの証人としての宣教のわざが行われたことになる。⑦のポイントはこの意味において部分成就である。エルサレムでの宣教は開始したが、その他の地域にはまだ及んでいない。

結論として言えることは、ポイント①～⑦は全てJ事件で成就したということである。しかし、ポイント②と⑦はJ事件だけでは部分成就に終わったという事を強調したい。もう一つの大切な観点であるが、Jdの異言現象はヨエル二・二八～三二の中に言及されている預言、幻、夢のどれにもあてはまらないけれども、これらすべてに共通していることは、キリストの証人として宣教のことは語るための力が賦与されたことを示すしるしであったことである。聖霊の来臨預言において明確にされていることは、福音・宣教の業が伴うようになるという点である。手段は、使徒二・一四～四〇に記録されている人々の理解できるペテロの説教のようであっても良いし、預言、夢、幻、異言が用いられる場合もあるということである。

(二) S事件

使徒八・四～二五にサマリヤで起こったJ事件と類似した事件が記されている。それによると、ステパノの殉教後起こったエルサレム教会に対する激しい迫害によって散らされていった人々の中にエルサレム教会の執事の一人ピリポがいた。ピリポはサマリヤの町⁽⁹⁾に下り、人々にキリストを宣べ伝えた。ピリピの数多くのしるしを伴う宣教の働きによって、多くの男女が信じて水のバプテスマ(即ち洗礼)を受けた。エルサレム教会ではこの報を受け、使徒達の間からペテロとヨハネを彼らに遣わすことになった。これによって、サマリヤ(S)の信者が聖霊のバプテスマを受ける事件が起こるわけだが、S事件は次のように要約できる。

Sa エルサレム教会から使徒であるペテロとヨハネが派遣されサマリヤの信者のところにくる(一四節)

Sb ふたりはサマリヤの信者が聖霊を受けるように祈った(一五節)

Sc ふたりは彼らの上に手を置いた(一七節)

Sd 彼らは聖霊を受けた(一七節)

Se 目に見えるしるしが伴った(一八節のシモンの反応より)

Sa～Seの事象の中で、Seは記されている事象ではなく、推論に基づく。魔術師シモンが「聖霊が与えられるのを見た」(一八節)とあるように、視覚に訴える何らかの現象によって、聖霊を受けたと判断できたのだろう。とすれば使徒達もそのような現象を見た筈である。J事件の体験者である彼らは、Jと同じような事象が生じたので、聖霊のバプテスマが起こったと確信したと思われる。

S事件では、聖霊来臨時に成就される①～⑦のポイントがどのように成就されたのかを探ってみたい。

①はS事件でも成就した。

②はサマリヤの町で、ペテロとヨハネが祈った時、居合わせた全てのサマリヤの信者に成就した。

③はS事件でも成就した。